

## 幼稚園と小學校との 課業上の聯絡

東京高等師範學校教授 佐々木吉三郎

學校の仕事と、幼稚園の仕事とを比べて見ると、其の間に餘程の違ひがあつて、幼稚園から小學校に移つた兒童が、何だかまるで様子の變つた所に来たやうな感じを起し、教師が兒童に對する態度も課業が急に系統的になることも又教材の分量が急に増加して來る等、急激な變化を感ずると云ふことは、餘り面白い事ではありません。出來得るならば其の間を圓轉にして、餘り急激の變化を感せしめないやうにしたいといふ希望は、獨逸あたりでは七十年このかたの問題であつて、學校と幼稚園とを有機的に結合せんが爲めにいろ／＼の苦心をして居ります、既にフレーベル自身も、丁度幼稚園の最上の學級即ちこれから小學校に移ると云ふ間際の學級を、媒介學級とでも譯しませう

か Die Vermittlungsklasse といふものを設けて、幼稚園と學校との中間に位する性質のものにして其の間の調和を謀つたものであります。丁度生れ落ちるとから幼稚園に這入るまでに四つの階級を設けて居ります、即ち

第一階段、乳兒期 これは申迄もなく母親の愛育の許に、主として身體を健全に育てる事を、注意する時期で、手足とか、五官などが、専ら發達する時期であります。

第二階段、家庭幼兒期 これは獨りで遊べるだけの部屋を興へて置いて、いろ／＼の玩具や何かで、身體、關節、五官等を自分で使つて、だん／＼發育させる時期で、尙言語もこの時期に發達するものであります。

第三階段、幼稚園期 これは大勢の子供の中に這入つて仲間の一として生活をする時期で、このやうに人間との交際によつて陶冶を受けると云ふ事は、これまでに比較して全く新たな事情である

のであります。尙いろくのもの直観し、知覺し、以て諸種の事物を知り、又自ら製作を致します。

物と物との關係、それ等の成立、成立の仕方などを、觀察する事も出来るやうになります。

第四階段、媒介學校期、之れは今まで實地又は實物を直観して居つたのを、思考作用に訴へるやうに引き移す階段で、云はゞ事物直観を概念に導きこむ端緒を開く場所としてあります。

斯様に考へて居るのであつて、要するに、學校時期と、幼稚園時代とは、性質が違ふ。學校と云ふものは兒童に授けやうとする材料に重きを置くのに、幼稚園は材料でなしに、兒童其物が本體で、子供を只自然に發育させればよいといふ時期であるから、勢ひ兩者の間に幾分の溝渠が生ずるといふことは、止むを得ぬ事で、従つて其の中間に媒介學校、若しくは媒介學校と云ふものを設けて、之れを調和しやうといふ考へが趣つた事であらう

と思ひます。英吉利の方でも The Transition と云つて、丁度小學校と幼稚園との間に中間の階級を設けておきます、英國倫敦市なる有名なフレーベル教育院の實際を見ても、満三歳より六歳に至るものを幼稚園と呼び、六歳より八歳に至る迄の者を The Transition と呼び八歳より十四歳に至る迄を學校と云つて居ります、即ち此所では満二年間これ丈けの中間に位する性質のものを置くわけになつて居ります。佛蘭西でも classes enfantines と云つて、直譯したなら幼年級とでも申しませうかこれは矢張り、同國で申す母親學校、即ち幼稚園と小學校との中間に位する、所謂媒介學校であります。

斯様に幼稚園の本元たる獨逸のみならず、英吉利、佛蘭西、其他にもあるだらうと思ひますが、一々よく存じませんけれども、要するに幼稚園と小學校とを、仕事の上から圓滑な聯絡のあるものにしやうといふ考へが、随分何十年來、現はれて居

るといふことが事實であります。

翻つて我が日本の事情を考へて見ますのに、この問題は、あまり人々によつて注意されて居らないのみならず、甚しきは小學校に従事する人々が、幼稚園といふものをなくともよいものと考へて、幼稚園を経て來たものは小學校から見ると、却つて扱ひにくいとか、悪くませて居つて、つまり、なにも劣つた結果を呈して居るとかいふやうに、チンから聯絡を講ずるよりも、幼稚園がない方がよいと云ふやうな、口吻をもらすものもあるやうであります。又幼稚園の方に従事して居らるる方々も、小學校の初歩の兒童の取扱ひ方に關して、幼稚園との聯絡上、斯くありたい、といふ希望を以て、熱心に主張する人も、あまり聞きうけないやうであります。畢竟この問題はまた着手されて居ないと云ひませうか、或は有耶無耶のうちに葬り去られて、一時の平安をむさぼつて居るといふやうにいられる有様ではありますまいか。私の關

係して居る、東京高等師範學校の附屬小學校第一部の生徒は、昔からのしきたりで、其の生徒の半分位はお茶の水の女子高等師範の附屬幼稚園の子供を收容することになつて居ります。これはたゞ幼稚園の子供を小學校にすぐ入れるといふだけの事で、形の上の聯絡に過ぎないから、まだ充分に内容の聯絡が考究せられて居りません。昨年兒童の體格の調査をして、之れを標準體格と較べて見た時に、一寸思ひ付いた事ですが、どうも尋常一年に入學した子供が尋常二年に成る迄の一年間の身體の發育狀況が、標準體格(三島博士の健體兒童發育表)に示されてある發育の率程になつて居ない、二年から三年になる處では、大分發育が良好で、線を以て描くといふと標準率よりも大邊急に昇つて居ることを見ますが、どうも最初の一年間はその律が甚だ宜しくない、これは第一部も第二部も第三部も同じやうであつたから、必ずしも幼稚園から來たか來ないかといふ問題に、關係

をつけて論じなくともよい事でありましたが、少くとも日本に於ける一年生の取扱ひ方が、或はあまりに大人扱ひで、家庭や幼稚園で頑是なく遊んで居つた子供に、毎日三時間とかいふやうな長い間、一定の順序のある仕事を課する爲めに、兒童の發育状態に斯くの如き變調を、惹き起したものであるまいかといふ觀を起したのであります、即ち云ひ換へれば、小學校に置ける初學年杯の取扱ひは、或は歐羅巴などに於ける媒介學級的の取扱ひをする方が、よいのではなからうかといふ觀を起したのであります。

斯様な問題は獨り體のみならず、尙他の學科から、考へらるゝに相違ありません折角幼稚園で發達しかけた萌芽を、小學校はちつとも省みないと云ふやうな事も、キツトあるに相違ありません、それで歐米諸國でも將來幼稚園と小學校の二ツを圓滿に結びつけるには、幼稚園が今一層學校に近づいて來て、幼稚園と云ふものは、現在の學校が

價値ありと認めたもの丈を、授くべき所であるとするか、又は學校が最少し幼稚園に近づいて、幼稚園でやつた仕事を成る可く採用して、それをついて發達させらうにするか、二つの方法より外に名案がないといふ様に申して居る様であります。前の方法によれば、フレール氏の所謂作業などは全部又は一部分消へてしまひ、直觀材料もコメニユース流に、繪を示す位の事となつてしまふであります、又後の方法によれば、小學校の初學年は、大部分遊戯などをやるやうになり、豆細工だとか、折紙だとか、積木だとかいふやうな事をするやうにならなければならぬと思ひます、何れにもせよ、幼稚園の先生と、小學校の初學年の先生とは、最少しお互に知り合はなければなりませんそれで、私は別に中間學校だとか、媒介學級だとかいふものを設けやうとは決して主張しません、寧ろ小學校には、幼稚園のことを知つて居る小學教員を一二人使用したならば、フレ

「ベル流の教育法を、小學校が利用する事が出来て、至極都合が宜しいであらうと思ふ。今一步進めれば幼稚園といふものは、恰ど小學校といふものゝ、初歩の階級と見做す様にして、事情の許す所にはどん／＼これを併置するやうにし、獨立した幼稚園よりも、小學校と併置した幼稚園を奨励するといふ事にしたならば、次第にこの問題が圓滿なる解決を見るやうになるであらうと思ひます。さうなると幼稚園といふものが學校系統上、必然考へなければならぬ問題となつて、幼稚園が急に其數を殖やし、又諸種の點から改良發達を促がさるゝことゝなると思ふので、我國の如く、幼稚園の數の頗る少ない國に於ては、其の奨励上から見ても大に得策であらうと思ふのであります。

心の花

福羽美靜

匂ふ櫻は春の色

染めし紅葉は秋の品

人の心に咲く花は

千年の後までかゝるなり。

## 子供の色彩感覺に就いて(上)

文學士 菅原 教造

家庭に於ても幼稚園に於ても幼児と色彩との關係は極めて密なものであります。従つて色彩問題は幼児教育上最重要な問題の一つであります。即ち色彩專攻の菅原學士に乞ふて此論を掲載することにしました。精讀をおすすめすると共に、又各自の御研究を希望します(編者)

人間の色彩の感覺はどう云ふ風に發達してゆくものであるかといふことは、歐洲では餘程以前から注意されて、心理學の立場からも、又、人類學、生物學、生理學、文獻學等の諸方面からも熱心な研究が試みられて居るけれども、然し未だ一定の解決を見るまでには至らないやうである、私は此の問題が現今どう云ふ方面まで進んで居るかといふことを紹介して、兒童教育の參考に供し度と思ふ。

### 一、リーヴァース氏の研究

野蠻人の色彩感覺を研究した學者も澤山にあるけれども、其の中でトレース海峽の住民に就いて研